
ANOTHER BR

幽識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANOTHER BR

【Nコード】

N0950A

【作者名】

幽識

【あらすじ】

小説「BATTLE ROYALE」の外伝・・・。

死愛解始 0

0

街の建物が作り出す色とりどりのネオンが、夜という時の刻に周囲を支配する闇を遮り、

己の存在を主張するかのように、点滅という与えられた動作で、見せかけの移動や文字の形になる、といった芸を、その近くをこれまたさまざまな方向へ進んでいく人々へ見せつけていた。

鶴本浩也（N県慧馬町立慧馬中学校3年B組男子12番）は、そのバスの外の景色を隣の席に座って漫画を読んでいる渡辺優（同男子21番）の頭越しに暫く眺めた後、すつと制服である詰襟の上着の左袖を捲り上げ、その下に存在するデジタル式の腕時計に目をやった。

ぱつぱつと秒刻みに規則的に数字が変化するパネルの内側、そこには現在“PM6:00”と表示されていた。また、その数字のすぐ上、日付を表示するためのパネルがあり、“May23”とあった。

5月23日。この日はこの国、“大東亜共和国”が定める、中学3年生の修学旅行出発の日であった。そのため、この慧馬中でも、クラスごとにバスに乗り、目的地である関西地方へ出発したわけである。交通手段がバスのため、初日は車中一泊という修学旅行も、なんだか運動部の遠征みたいでひどい気もするが、まあ良いのではないだろうか。今は賑やかなこのバス内も、高速道路に入り、関東地方の半ばに入る頃には、少しは静かになるだろう。

浩也は腕時計から目を離し、今度はバスの中をぐるりと見回した。バスの淡く明るい蛍光灯の下、3年B組40人のクラスメイトが思い思いにおしゃべりやゲームなどをして時間を過ごしていた。今、浩也の座っているのはバスのほぼ中央部の、丁度浩也の右足が通路に自由に伸ばせるようになっていた席で、そこからは身を通路に出

せばかなりのクラスメイトを確認することができた。

バスの前の方では、担任の岩元先生を取り囲んで、クラスのマスコットキャラクター的存在である君島充（男子5番）や、クラスのお調子者代表の淀倉塔次（男子20番）や河豊円（女子4番）がわいわいやっていた。

その後ろにはクラス委員長の長谷川健（男子16番）を中心として、彼と仲が良い近藤平八郎（男子7番）や冴木ゆかり（女子7番）達が座っていて、なにやら話をしていた。

この3人は、学級会は勿論、学校行事などにも積極的に取り組むいわゆる優等生グループとして知られていた（そういえばこの修学旅行の計画を立てるためのホームルームのときもそんな感じだった気がする）。

その迎え側の席辺りには唐沢義明（男子4番、野球部）、田口孝則（男子11番、陸上部）、南條忠臣（男子14番、男子テニス部）といった体育系の男子が集まって座っていて、これもなにやら（おそらく、また自分たちの部下の試合についてのことだと思うが）話していた。

そんな感じでバスの前方を見ていた浩也は、そのとき急にとんとんと肩を叩かれてその方向、自分の隣の優を見た。

優が、おそらく今読んでいた漫画のあるページ（まちまちにページ番号が表示されただけの週刊誌なので、案の定ページ番号がわからなかった。そのことで浩也は幼いころ何故目次なんかをつくるのだろうと疑問をいだいたことがあった。ヒマだったんだな、俺）を開き、浩也に差し出していた。

「浩也、そのページから読んでみ？面白いからさあ」
そう言いながら、密かに笑っていたのか目の淵を湿らせながらも優はにっこりと笑った。

渡辺優。こいつとは小学校の時からずっと一緒だった。まあ、いわゆる幼馴染というヤツだ。中学3年生にもなるというのに身長は160cm未満と、男子にしてはあまり高くなく、顔のほうももう

少し成長すればハンサムになるかもしれないのだが、今はまだ幼さが残っている。趣味の漫画やゲームも、中には小学生向けのようなものもあった（まあ、これに関しては自分の目も厳しすぎると浩也は感じたことがある。高校生も、それに大人だつて一端のものはやっているだろう）。しかし、こんな優だが、正義感はとても強く、やらなければならぬこと等に対しては懸命に取り組んでいたし、他人にとっても親切だった。

特記事項として書くならば、優はサッカー部のエースだった。浩也自身も小学校の頃はサッカーをやっていて、優との名コンビで名のある程度轟かせていたのだが、中学校に入るとサッカー部には“スポーツは勝つためだけにやる”というくだらないポリシーを持った顧問がいたので、それでそのポリシーに人一倍反発する浩也の心の中、サッカー部へ入部するという選択を抹消してしまったのである。しかし優はそれでも入部した。自分とはえらく違う強い心を、優は持つていると感じた。同時に自分を軽蔑した。それから自分は別の面で優を見習い、努力しようと誓ったのだ。

とにかく、優は普段は無邪気で子供っぽいが、自分の信念を貫くすごい奴だった。

浩也はそんなことを思いながら、優がよこした漫画のページをぱらつとめくった。

「……どうしたの？ 浩也。ぼーっとしちゃってさ。」

浩也の先ほどまでの表情がそうだったのか、はたまた自分が勧めたギャグに浩也が反応しないのが気に触れたのか（実際、優が面白いといったギャグは、マイナーすぎて浩也にはあまり分からなかったのだが）、優が浩也に言った。その言葉を聞いて浩也は慌てて「何でもねえよ」と言葉を返した。だが、

「うっそだ」と優が言ってきた。

はい？

「どうせ、彼女のこと、見てたんだろ？」

優はそう言いながら、通路を挟んで3列前にある席を指差した。

浩也は暫く優の言わんとしていることが理解できなかったのだが、

理解した途端、顔があつくなつた。ほぼ同時に

「ば、ばかなこと言ってんじゃねえよっ！」

思わず優に向かつてそう叫んだ。それで優はははっと笑いながら「ごめんごめん」と浩也に言った。それで少しだけ、浩也は落ち着きを取り戻した。

まったく、優ときたらからかうのもいいところだ……。その席には浩也が前々から思いを抱く 要するに“好きな”女子が座っているはずだった。

赤神陽子（女子1番）。彼女はこの3年B組の学級副委員長を務めていた。黒く、さらっとした髪を首の後ろでポニーテール風にし、黒く透き通るような瞳（浩也談）を持つ女の子で、そのセーラー服を纏った体は小さく、顔も優より幼さが残っていたが、常に正確な思想を持ち、それでいて頭が良く、しかし謙虚でクラスメイトに優しく接していて充分に美しかった。

その陽子は今は同じ吹奏楽部で幼馴染みでもある向井田美紀（女子18番）となにか話しているようだった。

「おい浩也、いくら青春の修学旅行だからって、計画性を持つてベツドインしなきゃだめだぜ？」

自分の席からやや身を出して、今度こそ陽子のことを見ていた浩也の後ろから、このおどけたような声が飛び込んできた。浩也はその口調と声で、それが誰なのかすぐにわかった。それでその言葉の意味などは構わずに（え？ いやいやこれはわかる人だけでいいから、こいつだけにしか理解できない異世界語ですから。気にしない、気にしない）、振り返った。振り返ると同時に

「財布の相棒がたくさんいる奴に言われたかねえよ。」

皮肉って言ってやった。

振り返った浩也の目には予想通りの人物が映った。後ろ髪はある程度切って、右の前髪を長めに伸ばしてワックスである程度固めた、といった髪型。脇の髪も、少しだけそんな感じ。きりっとした目つ

きや口つき。自分の“悪友”的な存在
だった。

草薙照雄（男子6番）

照雄は浩也の言葉に、その端正な顔の口元に笑窪をつくつて
「悪かったな、もてすぎて。」

と言った。これも浩也を構うための冗談だ、と浩也は分かっていた
が、それを普通に受け止めるのも癪だったので適当にうるせえ、と
言ってやった。

それで照雄は逸走口元を歪めると、

「その調子その調子、お前のそのパワーで恋愛をしるよ。」

楽しそうに言つて、バスの前の方へ歩いていった。おそらくそこに
あるクーラーボックスの中の飲み物を取るついでにここに寄つたの
だろう。いや、逆なのか？

しかし、どんなパワーだ？言葉の意味がわかんねえよ。

気がつくと優が隣で、漫画を読んでいるときよりも可笑しそうに
笑っていた。

おいおいおいおいお兄ちゃん。そんなに愉快でござい
ますか？

「ははははっ、浩也、また照雄にやられたね。」

優が笑いながら言ってきたので「お前は黙ってまた漫画でも読んで
ろっ！」と手にしていた週刊誌を優の膝に放つてやった。

草薙照雄は中学1年のときから一緒のクラスになった。慧馬町は、
市内では比較的大きな町なのにもかかわらず、中学校は慧馬中だけ
だった。そのため、町内にある2つの小学校からだけでなく、近く
の田舎町の小学生や、隣町でも通学路がこちらに近い生徒が毎年慧
馬中に入学してくるのだが、その田舎町の少数人数の学校から慧馬
中へ入学した浩也は、

慣れない多人数の学級に最初は少し不安を抱いていた（もちろん優
も入学したが、1年のときは優とはクラスが違った）。その時に、
後ろの席から微笑みながら話しかけてきたのが照雄だった。

「俺、三浜町から来た草薙って言うんだ。クサナギテルオ。よろし

くな。」

これがファーストコンタクト。照雄とは休み時間になる度、いや授業の暇なときなどもよく話した。

「あー、お前が鶴本浩也か。鶴本っていったらサッカーやってた奴らからちよつと名前聞いたことあるぜ。サッカー部入んの？入らない？まあ、別の趣味見つけてやってみるのもいいことだわな。」

照雄はくだらないことでも浩也が今まで知らなかったことを教えてくれた。

「まあ、三浜はここらじゃ情報が一番あるからな。今度行きつけの店とか案内してやるよ。」

しかも、運動神経もかなり良かった。優や浩也はサッカーをやっていてそれが養われている、といった感じだが、照雄の場合は基礎体力から違うのだ。学校の体育の授業だけで充分なのである。

多少の悩み事を抱いたときも相談相手になってくれたし、アドバイスをしてくれた。いいヤツだった。クールで気取っているが、優と同じぐらいに。

でもこいつらに赤神陽子が好きだ、と伝えたのは間違いだっただかもな……。

浩也は優と照雄をちら、と見た後、今度はその首を後ろのほうへ向け、そう、丁度バスの通路の突き当たりを視界の中心にその近辺を見た。

そこにはクラスの中でも悪ぶっている、いわゆる不良グループが集まって座っていて、周囲よりボリュームの大きな笑い声が時々聞こえてきていた。髪を逆立て、両耳にピアスをしたリーダー、矢吹克弥（男子19番）、その横に座って茶色く染めた髪を人差し指でいじっている克弥の付き合い相手、細川くるみ（女子16番）、くるみの付添いで、今は静かにどこかを見ている横山利美（女子20番）、金髪を肩まで伸ばした、おつちよこちよいのグループの特攻者、船井竜太（男子17番）、やや肥満気味の背の低い体にポマードを塗ったくった髪の二宮康治（男子15番）で、こいつらが怖い

のか、もしくはその声の音量を気にしているのか、その前の津堂百合栄（女子１１番）と山崎真弓（女子１９番）は、ちらちらと後ろを見ながら話していた。

「おい、前行ってジューズ持って来いよ。」

少し声を落として、竜太が前の席へむかってそう言ったのが聞こえた。

そうだ。浩也の位置からは見えないが、その真弓たちの席の通路を挟んで隣、そこには学生服を身に纏った、金髪のシャギー入りの髪型の男が１人、座っていた。おそらく今呼ばれるまでは、先ほどの浩也と同じく、窓の外をただ見つめていたのだろう。

浩也たちは２年からクラスがえもなく進級したのだが、その男

鮫島真悟（男子８番）は、４月に３年Ｂ組となった転校生だった。その顔は一見柊深雪（女子１５番）や山崎真弓たちがきゃあきゃあ言うようなスター歌手でも敵わないほどなのに、無表情、というより少し睨んでいるような顔で、そのため、直後船井竜太あたりによく絡まれていて、今では不良グループの一番下っ端のような存在になっていた。しかし、それでも鮫島は、同じくちょっかいを出されている大場洋一（男子３番）のようにびくびくしていないで、ただ、したがっていた。

「はやくしろよ。」

そう言われ、鮫島は席を立ち、前へ前へと歩いてきて、浩也の席をすつと通り過ぎていった。

「おい浩也、お前も食べないか？」

目を鮫島の方へ泳がせてぼーっとしていた浩也は、その声で急に現実に取り戻された。

声の主は照雄で、その照雄は右手でキャンディーの入った透明の袋を差し出していた。

見たところ、市販のものではない。と、すると

「なんだ？この飴玉はお前がつくったのかよ？」

照雄におどけて言っただけ。しかし、照雄はそれでまたにやりと

し、ぴしりを姿勢を正してレストランのボーイよろしく返した。

「お客様、こちらの品はあちらの赤神陽子様から、お客様へ差し上げられるよう、申し

つりましたゆえ、お持ちした次第でございます。」

え？

“赤神陽子”という固有名詞を聞いて、照雄お前絶対客とれねえよ、という突っ込みを実行しようとしていた浩也は、その手の行き場をなくすと同時に、目を丸くした。

いや、そりゃあ、照雄がいくら器用だからって言って、お菓子作りにまで優れているとは思っていない。家庭科の成績はたしか2だったし。それだから女子の誰か、そうだな、河豊円あたりからもらったのかなー、等とは思っていたが、まさかそう来るとは。

浩也は再び、斜め前の席を見た。陽子が顔を出して、照雄の行動を伺っていて、やがて目があった。すると陽子は微笑して、何か言った。

浩也は視力検査で、無理してこの切れている部分がどこか見ようとしている小学生のように上半身をのり出し、陽子の言葉を聞き取った。

「きゃーん、浩也君好き好きチューして」

うるせえクサナギ。んなこと彼女は言ってるねえ。

「よかったら、それ食べて。」

そう言っていた。浩也は嬉しさを堪えながら、陽子に「ありがとう」と返し、それで陽子は再び微笑んで、椅子の陰に戻った。

浩也はそこまできて、やっと自分が笑窪をつくっているのに気が着いた。

「あーお客様は幸運の持ち主であらせられますね。」

照雄がにやにやしながら変な言葉を連ねた。

浩也はそんな照雄をよそにしながら袋から橙色のキャンディーを1つ取って口の中へ入れた。うん、うまい。柑橘系独特の味が、口の中へ広がっていく。

「おい、悪いが少しどけてくれ。」

この声が浩也の耳に入ってきたのはこの時だった。ふと、その声のした方向　　そう、

丁度照雄が立っているバスの中央通路を見た。

1人の男が照雄の方を見て立っていた。それで照雄は自分が通行の邪魔になっっているのに気が着づき、男に「ああ、わりいな。」と避けた。それからその男はただ静かにバスの前の方へ歩いていった。それで、それまで気がつかなかったのだが、その男は自分のすぐ後ろの席に座っていたのだと浩也はわかった。

男　吾妻和磨（男子1番）は、オタクやスポーツマン、そして不良といった個性派な

人物が集まったようなこの3年B組でも、ひととき変な奴だった。まあ、それは彼もまた、鮫島真悟と同じく転校してきたので異様な雰囲気を漂わせているというのもあったのだが、

学校で誰かとかかわる、という場面を見た例が無かった。いや、その吾妻自身が“学校に出席する”と言うことをあまりしなかった（登校拒否だ、いやはや）。服装も、前の学校の制服なのか、青い詰襟で、唯一確認できた彼の荷物はキャスター付の旅行鞆であり、かなり目立っていた（そのためか、よく吾妻も竜太あたりに絡まれていたのだが、こちらは次の日にその金髪が被さった頬に一部、アオアザをつくって登校してきて、それ以来吾妻にはちょっかいを出さなくなった）。とにかく、不思議な男だった。

吾妻が去ってから、照雄も少し席に戻るわ、と言って去っていた。恐らくまた、彼の小学校のときからの友人の菅原大輔（男子9番）の会話の相手をするのだろう（大輔は2年のときクラスが一緒になった。照雄の幼馴染みとあってか、結構浩也たちとも話した。ただ、今は寝ているのか、先ほどの優と同じく漫画を読んでいるのか分からないが、顔を出さなかった）。それで暫くは優と2人で雑談を交わし、他のメジャーな漫画を読んだりしていたのだが・・・

9時を過ぎたころ、浩也はバス内の異変に気がついた。

つい先ほどまで賑やかなお喋りが飛び交っていたのに、今はしんと静まり返っていた。

ふと、隣の席の優を見た。いつの間にか、優はだらんと背もたれに寄りかかり、瞼を閉じてすうすうと眠りについていた。

浩也は辺りを見回した。自分の通路を挟んで隣の席、徳川歩美（女子１２番）が、クラス女子ではトップクラスの美貌溢れる顔を、抱えた荷物にうずめていた。その３列前の席、赤神陽子も眠っているようで、音沙汰一つしなかった。

最早車中のほぼ全員が眠りに着いてしまっているようだった。

あれ、なんだ？俺も何か眠く、なつて……………

浩也自身も激しい眠気に襲われていた。

おいおい、いくらなんでも眠るの早すぎだろ？青春の修学旅、行だぜ？もつ、

と楽しまなきや……………だめだ、ろが……………

浩也もすぐ、眠りに着いた。

【残り４２人】

死愛解始 0（後書き）

いまさらと思うかもしれませんが、死ぬほど
ヒマで何でもオツケーという方々へ。

死愛解始 1

1

「・・・也、ねえ、浩也！」

この声で、浩也はうつすらと目を開けた。そしてその直後、浩也は一瞬だけ、慣れ親しんだ3年B組の教室にいる、と言う感覚に襲われた。

そして今、自分に呼びかけているのは、教室で隣の席の渡辺優だということを確認した。

それで自分はまた英語の授業中に居眠りをしていて、担当の大島雄一先生にばれそうになっているのを優が事前に防ごうとわざわざ起こしてくれているのだろう、そう思ったのだが

違った。浩也は電気ショックを食らったようにばっ、と起き上がった。

「よかった、やっと起きた。」と言う声がし、その声の主は自分が虚ろに思った通り、渡辺優のものだった。

しかし、何か、何かが違う。優の声をよそに、浩也は周りを見廻した。

そこは教室だった。だが、浩也が英語の授業を受けていると勘違いした普通の教室ではなかった。床やロッカーなどが木で作られた、いわゆる木造の教室で、前にある黒板は相当使い込んだのだろう、色あせていた。

そして何より浩也の目を引いたのがその窓だった。普通はガラスが張ってある両側の窓が、この教室は黒いもの。そう、バーベキューでよく使うような鉄板、に覆われていた。

そのため外からの光は一切無く、教室の天井にある蛍光灯の淡い光だけが、教室中を懸命に照らしていた。

そしてその蛍光灯の下、つい先程までバスの中にいたはずの（少なくとも浩也はそう感じた）40人のクラスメイトたちが机に両腕

を乗せ、その上に頭を乗つけて伏せていた。全員、眠っているようだ。

浩也は唐突の出来事が一度に多く起こりすぎて 否、既に起こっていたのか なにがなんだか理解できなかったが、ようやくと優の方を見た。

「優・・・どうなってるんだ？これ。」

浩也はほとんど意識せずに訊いた。

「さあ、分からない・・・でも、少なくとも僕たちは夢を見てるわけじゃないみたいだね。」

優はそう言い、ふとその瞳を横にずらした。そして、かすかにその瞼をより大きく開いた。

「・・・なんだ？これ。」

そう言って浩也の前の席に座って、他の皆と同じく机に顔を伏せている武村千鶴（女子10番）を指差した。浩也もその指先を追いつ

見た。千鶴が着ているセーラー服の襟の上、サラリとした髪の間から除けた白い首に何か銀色のものがあつた。それは蛍光灯の光を反射し、淡く光っていたが、そのときの浩也にはそのようなことはどうでもよく

浩也はそれがなんなのか認識した。

認識した瞬間、自分の首にもひやりとした冷たい感覚が走った。

「ちよつと待て。」

浩也はそう言い、自分の学生服の第一ボタンを外してその首筋を露わにした。その瞬間、それを見ていた優が息を呑むのがはっきりと分かった。

「浩也・・・お前の首にも・・・おんなじ物があるぞ・・・首輪・・・首輪だ！」

優がそう言い、思い出したように浩也と同じく、自分の制服のボタンを外した。優の首を見た瞬間、浩也もなんだこれ・・・と言いたい気分になった。そこには優の言った通り、銀色の首輪があつた。そしてそれは優の首にしっかりと巻きついていたので。おそらく、自

分の首にもこれと同じものが巻かれているのだろつ。急に息苦しい気分になった。

浩也は再び周りを見回した。そして、改めて息を呑んだ。机に伏している女子生徒の首には間違はなく優と（そして自分と）同じ、銀色の首輪が巻かれていた。そして勿論、詰襟の為に見えにくいのが、草薙照雄にも、長谷川健にも、そして他の男子生徒にも、同じ

“銀色”が巻かれているに違いなかった。

わけがわかんねえ

何なんだよ、これ

頭の中が、もやもやと旋回した。突如の異変・ぐるぐるぐるぐると脳内を駆け巡る・

洗濯機の水の流れのように、まわってまざってよこれて。

そんな時、浩也の耳にがらつという音が聞こえてきた。

浩也は驚いてその音の方向を見た。何の音か、聞き覚えがあつた。そう、授業開始、教師が入ってくる時に聞こえるドアの音だ。

1人の女がやってきた。長い髪ダラリとした髪を後頭部に密着させた形で1つに束ね、縁の無い丸眼鏡をかけていた。

しかし、なにより浩也が一番目に付いたのは、その服装だった。

運動部でも着ないような真っ赤なジャージを身に纏っていたのだ。

女は教室の前にある教壇に歩いてきて、そこに立った。そして浩也や優が目に入っていないかのように教室を見回し、それから机の生徒たちを見回した。

それで浩也はその女に気を取られていて今の今まで気づかなかつたが、ようやく他の生徒たちが目を覚まし始めたのに気がついた。

それからその女が来たのが引き金となったかのように、浩也の目の前で次々とクラスメイトたちが目を覚まし、先程の浩也同様、何が起こったのかわけが分からない様子でただ周りをきよきよと見回したり、お互いの顔を見合わせ、何なんだ？という表情をつくっていた。

ほぼ全員が頭を上げたところで、教壇に立っていた女が、ようやく口を開き第一声を放った。

「はい、皆あ起きたー？よく眠れたかー？」

その声ははきはきとはしていたものの、どこことなくへらへらした感じも混ざっていた。

だが、この声を聞いてようやく皆は前にいる女が存在に気づいたようだった。

その反応を読み取って、女は眼鏡の奥の瞼を笑いの形に変え、にこつと浩也たちに笑いかけた。

【残り42人】

死愛解始 2

2

女は笑みを浮かべながら、変わらぬへらへらとした口調で話を続けた。

「はい、じゃあ皆起きたようなので説明します。」

教室の空気がしんとした中、教壇の女の声だけが高らかに響いていた。

女はそこまで言うと、くるりと浩也たちに背中を向け、黒板に白いチョークで何か書き始めた。

少し間を空け、女はチョークを置き、再び浩也たちの方を向いた（相変わらず笑みを浮かべていた）。

浩也は黒板を見た。そこには“ 闇口久萌子 ”とチョークで大きく書かれていて、その脇には“ 26歳独身 ”とあり、さらにどういう冗談なのか、それとも本気なのか、とにかくそれらの文字がハートマークで囲まれていた。

女が再び口を開いた。

「はい、私が皆さんの新しい担任になったヤミグチクメコです。ちなみにここに書いた通り独身だから、男子なら相手に立候補してもいいぞー。」

あまりにかけ離れた話題にほぼ全員があっけにとられたと思う。

それは今、闇口と名乗った女にも分かったらしく、疑問を抱いたような表情をしていた。

しかし、次の瞬間には、だっはっはっはと高笑いしていた。

「あー、冗談だよ。私にはちゃんんと心に決めた人がいるんだからー。立候補したって無駄だよ。惜しかったなー。」

女はまた素っ頓狂なことを言い、皆をあっけにとらせた。

しかし、ここでこの空気が破られた。乱暴に椅子が動く音がした。「ふざけんなよ。何なんだ？」

教室の最後尾に陣取っている不良グループの1人、船井竜太が席から立ち、いつもの喧嘩腰で前にいる闇口に言葉を投げた。

「私たちは修学旅行に行く途中だったんです。どこなんですか？ここは」

さらにクラスの優等生、溝渕朱実（女子17番）からも。

これらの声が引き金となって、教室がざわつき始めた。

「ねえ、ここ、ほんとに何処なの？」

「学校か？」

「ばか、木造だぜ？俺らの教室じゃねえよ。」

「大体誰だよあのババア・・・」

「何なんだ？一体。」

その光景はどことなくバスの中のおしゃべりの様子に似ていた。

話の明るさのベクトルは180度方向転換していたが。

しかし、その中、他人と話さず黙っている者もいた。

まず目に付いたのは、窓際の最後尾（そう、優に言わせれば、居眠り、早弁、漫画読み放題という3つの利点があり、夢の席だよというその席）に座っている、吾妻和磨だった。

さらりとした髪の毛の奥、きりつとした2つの目が、教壇の上の闇口を見据えていた。

それにその最後尾列の反対側、廊下に一番近いその席に座り、涼しい眼で前をただじつと見ている鮫島真悟。

闇口はしばらくその光景を黙ってみていたが、急にパンパンと手を叩き、浩也たちの注意を自分の方に引きつけた。

「はいはい、ほらほらほらー、お前ら静かにしろー。人の話を聞くときはちゃんと相手の目を見るよー。それが人に対する礼儀ってもんだろー？」

その闇口の声で教室は一気に静まり返った。その中、闇口が話を続けた。

「はい、実は今日は皆さんにあるゲームをしてもらうためにここに来てもらいましたー。」

その内容は簡単です。たった一人になるまで殺し合いをするだけです。」

そこまで闇口が言った途端、浩也を含め、クラスメイトほぼ全員が耳を疑った。浩也は何かの間違いだと思ったが、次の闇口の言葉でそれは一気にかき消されることになった。

「と、いうわけで、今日は皆さんにちよつと殺し合いをしてもらいまーす。皆さんは今年の“プログラム”対象クラスに選ばれました。」

教室が、より一層静まり返ったような気がした。

“プログラム”。この言葉を知らない大東亜共和国国民はいないと思う。毎年、全国の中学3年生のクラスから任意の50クラスを選び出し、その生徒たちをクラスごとに殺し合わせるといふ殺人ゲームだ。“プログラム”のことについては小学校4年生の教科書から出てくる。抜き出すと 『私たちの国では毎年全国の50

組の中学生の先輩方を選び出し、クラスごとに戦う“プログラム”を行っています。選ばれた中学生はそれぞれ与えられた武器を使って戦い、最後に残った1人の生徒だけは家に帰ることができます。

我らが栄えある大東亜共和国のため、我らが共和国国民のお父様である將軍様のため、この“プログラム”は行われています。ですので皆さんも選ばれたのなら、誇りを持ち、ルールに従い、正々堂々と戦いましょう。そうすれば、あなたたち全員の魂は永遠に將軍様の下で生き続けることが（以下略）』

小学校4年からくそ食らえの文章が出ているのだが、実際に共和国政府の方針に、心から従うものはそうそういなかった。反政府集団も知らないところで少々騒がれていたし。

しかし、恐ろしいことにこの政府の決めたことはほぼ絶対になってしまうのである。“プログラム”は毎年、必ず起こる。法が改正でもしない限りは。

しかし、この大東亜共和国内に、中学校がいくつあると思う？1学年5クラスだとしても、1つの都道府県に40校としても、選ば

れる確率は実に188分の1だ。オーケイ、栄えある大東亜？將軍
サマ？上等じゃあないか。当たるわけがないぜ。

そんな風に浩也を含めたクラスの殆どの生徒たちはそう信じてい
た。信じずにはいられなかった。

「どうだー。凄いだろー？みんな驚いたか？」

闇口が明るくそう言った。

言った後、闇口が「んー？」と生徒たちをまじまじと見た。それ
は恐らく、闇口の言葉に反応を示さない生徒たちに疑問を抱いたの
だろう。しかし、こんなことを急に言われて反応する方がおかしい。
それで、闇口はやれやれとばかりにため息をつき、

「なんだよ、まだ信じられないのか？お前たちはー。しょうがない
な。おーい、お前たち入ってきてくれー。」

そう言い、パンパンと手を叩いた。

【残り42人】

死愛解始 3

3

闇口が入ってきた教室の扉が再び開き、3人の迷彩服を着た男たちが入ってきた。恐らく、こいつらは闇口に仕えている兵士なのだろう。肩からアサルトライフルを吊り、腰のベルトにはホルスターがついていて底にある拳銃の銃把が見えていた。

3人の兵士は、なにかごつごつした、寝袋のようなものを抱えていた。

兵士たちはそれを教壇の上にどりと乗せ、コンバットブーツの足音を立てながら闇口の脇に素早く並んだ。一番窓際の兵士はそばかすが目立ち、かぶっているヘルメットの下、

黒い天然パーマの髪の毛が除けていた。もう1人はつりあげ目の鱈子唇、最後の1人は髪を肩まで伸ばしていて先の方が乱雑に切られている、顔のほうにはあまり特徴の無い男だった。

「はい、君たちの“プログラム”を補佐してくれる人たちです。さあ、お前ら皆に見せてやってくれ。」

その闇口の声で、一番左（窓際）にいた天然パーマの兵士が、その寝袋みたいなものについていたチャックに手をかけ、じいーつと下に引いた。

「きゃああああああああっ！！」

突然、最前列にいた女子が悲鳴をあげた。すぐにその周りの何人かがそれに唱和した。

そして何？何だ？というように生徒たちが次々に立ち上がり、一気に悲鳴が膨れ上がった。

その中には元担任の岩元先生がいた 否、“あつた”のだ。

岩元先生は頭に大穴を空けた死体となっていたので。前頭葉の辺りを中心としたその穴からは灰色のゼリーみたいなものが飛び出して、髪の毛の所々に付着していた。その下の眼は両方とも血で真

っ赤に染まっついていて、どんよりとしたそれは眼孔から半分飛び出し、口は大きくだらんと開かれていて、まるでお化け屋敷の作り物の人形みたいだった。

「はいはいはい、ほら、静かにしろー!!」

闇口はそう叫び、またばんばんと手を叩いたが、それでも悲鳴はやまなかった。闇口はそれで再びやれやれ、というような顔をし

次の瞬間、闇口は教壇の脇に出て、右足で岩元の入った袋ごと、その教壇を蹴倒した。

がだあん、と教壇が床へ転がり、そこから落ちた岩元の入った袋は教室の隅のほうにぐしゃり、と落ちた。その時には、悲鳴はもう、やんでいた。

闇口はこれまでにない顔つきで一瞬生徒らを睨みつけたが、すぐに笑顔に戻っていった。

「あ、ごめんごめん驚いたー？でもあれなー、先生の言うことはちやあんと聞いてくれよ。」

そうしないとこの岩元先生のようになっちゃうよー。この先生なー皆が“プログラム”に参加することに反対しちゃったんだよ。めんどくさいので殺しました。まあ、突然押しかけたこっちも悪いんだけどなー。」

闇口は、君が悪いほどに優しく、そう言った。

「ふざけんな!」

突如そう言つて、席を立ち上がったものがいた。浩也は反射的にそちらを見た。

浩也より後ろの席、列ではやや窓際にいる益村邦宏（男子18番）だった。その坊主にした頭の下、両目から涙が流れていた。

「なんで殺しちまうんだよ!そんなくだらねえ理由で!!ふざけんなよ!!お前らどうかしてる!!異常者だ!!ぶっ殺してやる!!」

邦宏は教室の前にいる闇口たちに、そう叫び散らした。

闇口はそんな邦宏をばけつと見ていたが、暫くしてお約束のため

息をつき、言った。

「君は益村君だね？あのねえ、今言ったばかりでしょ？私の言うことはちゃんと聞けって

さあ。それは私に逆らうなってことだし、第一今のは反政府的発言だよ？」

その言葉が邦宏を動かす引き金となった。

「黙れ黙れ黙れえー！ー！ー！ー！」

邦宏はそう叫びながら闇口に向かって走っていった。

そのとき、唐突に、場違いに、浩也は思い出した。

邦宏は中学一年のときに父親を交通事故で亡くしていたのだ。それで自分と同じ体育的で人望の厚い岩元先生を父親のように慕っていた。勿論、生徒思いの岩元のこと、そんな邦宏を可愛がっていた。それなのに、邦宏はその父代わりの岩元の死体を、それもあんな凄惨な死体を、急に見せられたのだ。そうして、あるうことが面倒臭いから殺した、というのだ。ショック、という言葉には収まりきれなかったのだらう。

邦宏は闇口を殴るつもりだったのかもしれない。あるいはその首をへし折ってやるつもりだったのかも知れない。しかし、邦宏のやりたかったことが何であるかと、それより先に、闇口がジャージのポケットから黒いもの、自動拳銃を取り出していた。寸時、浩也はやめろ、と叫ぼうとしたが、既に遅かった。

ぱんつという乾いた音が教室に響き渡り、生徒たちが思わず耳を塞いだ。浩也も一瞬眼を瞑り、次に視界に入ったのは、至近距離から発砲され、後頭部に缶詰が二個ぐらい入りそうな穴を開けた邦宏の姿だった。血が、脳味噌の一部の様なものが、邦宏の頭から飛び出し、霧となって最前列の生徒たちに降りかかり、床にびちゃびちゃと落ちて、板を赤く染めた。邦宏の体がそのままぐらりと前に倒れようとしたが、が既に血に染まっていた。学生服の襟を掴み、「これ、じゃまだから」と言っ、そのまま“鱈子唇”に渡した。

“鱈子唇”はそれを片手で受け取ると、転がっている岩元の寝袋の上に、ゴミでも捨てるかのように重ねた。

この状況で冷静さを保てるやつがいるとするならば、邦宏のその死に様が岩元にそっくりだということに気づいただろう。そして、浩也のように邦宏の過去を知っていて、かつ冷酷なやつなら、尊敬する先生と同じ死に方で、しかもそのセンスのすぐ傍で死ねるなんて良かったね、と思ったかもしれない。いずれにせよ、この条件を満たしたものはこの場にはいなかったのだが。

邦宏？なにそんなところで寝てんだよ。風邪引くぞ？

引きずられた邦宏がつくった床の血の道、その先のぐったりとした学生服の体をほとんど何も意識せずに見た浩也は、再び頭の中が錯乱したような状態に陥った。急に吐き気が襲ってきた。あいつは、もう動かない。死体だ。紛れも無く、それは死体だった。先程まで叫び、勢いよく走っていたのに。あいつは、あいつはもう動かない。「そんな！！こんなの酷過ぎる！！」

呆然と邦宏の邦宏の死体を眺めていた浩也の耳に、トーンの高い声が飛び込んできた。

今度は女子14番の沼垣佳菜が席から立ち上がった。

ばか、やめろ。浩也は頭のどこかで、思った。こんな状況の中、お前が意見したって殺されるだけだ。だから、無駄に死ぬな。

しかし、そんな浩也の思いとは裏腹に、佳菜は浩也の回想録と似たようなことを再生した。

「益村君は岩元先生のこと大好きで、それで急に先生が殺されて、パニックになったただけなのよ！！ただ、それだけなのに、なんで殺すの」

佳菜が「よ！！？」と最後に言う前に、闇口の腕が水平に持ち上がり、ふたたび乾いた音が響いた。今度は眼を瞑らなかった。ほぼ同時に、佳菜の頭部から赤い液体が噴出した。佳菜の体が一回びくんと、恐らく本人の意思とは関係なく動き、そのまま椅子に崩れ落ちて、この教室で浩也が最初に目にしたように、机に突っ伏した。

すぐに上板に赤い水溜りができて、床へぽたぽたと落ち始めた。当座、死んでいた。

「佳菜！！ああああああああっ！！」

佳菜の後ろの席の山崎真弓が、椅子から立ち上がり、佳菜の体に覆いかぶさった。そしてあらん限りの声で泣き始めた。泣き叫ぶ真弓を見て、闇口が“鱈子唇”にアイコンタクトを取った。浩也は瞬時にその内容が何なのか予想できた。しかし、直後“鱈子唇”がアサルトライフルを真弓に向かって構え、銃口から火が噴かれた。

真弓の後頭部が弾け跳び、周りの生徒に頭蓋骨の破片や血の霧吹きがかかった。真弓の体はそのまま佳菜の死体に覆いかぶさり、2人の死体はタチの悪いオブジェとなった。加えて、岩元と邦宏も同様。オブジェが二つ。新作品、美術館に展示。くそ、ろくでもない！

連鎖だ。認めたくなかったが、岩元は自分の生徒のために、邦宏はその岩元のために、佳菜は邦宏のため、そして真弓は佳菜のために命を落とした。人を愛する気持ち、人を死なせていったのだ。惨かった。

「はいはいあのさ」

あまりの唐突さと惨さにクラスメイトが呆然と押し黙る中、闇口が口を開いた。

「皆はどうかわかんないけどさー、先生、早く進めたいんだ。だからこれ以上先生の話が無駄なことと止めないでくれるかなあ。そうしないと先生、つらいけどその人を殺しちゃうぞ」。だからあ、皆、話をちゃんと聞くようになあ。」

生徒たちはこの闇口の話をしつかりと理解したのかそうでないかは分からないが、とりあえずと言った感じで、その中の何人かが、ゆつくりと、恐らく意識とは無関係に頷いた。

それで闇口はにつこりと笑い、再び快活な声で言った。

「はい、いいでしょう。では、このゲームの細かいルールを説明します。」

【残り39人】

CAST

登場人物

・1997年度N県慧馬町立慧馬中学校3年B組

男子

1番 吾妻和磨 あずま・かずま
 2番 磯部隆司 いそべ・たかし
 3番 大場洋一 おおば・よういち
 4番 唐沢義明 からさわ・よしあき
 5番 君島 充 きみしま・みつる
 6番 草薙照雄 くさなぎ・てるお
 7番 近藤平八郎7番 こんどう・へいはちろう
 8番 鮫島真悟 さめしま・しんご
 9番 菅原大輔 すがわら・だいすけ
 10番 瀬戸 茂 せと・しげる
 11番 田口孝則 たぐち・たかのり
 12番 鶴本浩也 つるもと・ひろや
 13番 手塚俊平 てつか・しゅんぺい
 14番 南條忠臣 なじょう・ただおみ
 15番 二宮康治 にのみや・やすじ
 16番 長谷川健 はせがわ・けん
 17番 船井竜太 ふない・りゅうた
 18番 益村邦宏 ますむら・くにひろ
 19番 矢吹克弥 やぶき・かつや
 20番 淀倉塔次 よどくら・とうじ
 21番 渡辺 優 わたなべ・すくる

女子

1番 赤神陽子 あかがみ・ようこ
 2番 伊節美佐枝 いぶし・みさえ
 3番 斧持恵子 おのもち・けいこ
 4番 河豊 円 かわとよ・まどか
 5番 岸田絵梨奈 きしだ・えりな
 6番 工藤咲江 くどう・さきえ
 8番 城ヶ崎麗花 じょうがさき・れいか
 9番 諏訪愛美 すわ・まなみ
 10番 武村千鶴 たけむら・ちづる
 11番 津堂百合栄 つどう・ゆりえ
 12番 徳川歩美 とくがわ・あゆみ
 13番 名取秋子 なとり・あきこ
 14番 沼垣佳菜 ぬまがき・かな
 15番 柊 深雪 ひいらぎ・みゆき
 16番 細川くるみ(ほそかわ・くるみ)
 17番 溝渕朱実 みぞぶち・あけみ
 18番 向井田美紀 むかいだ・みき
 19番 山崎真弓 やまざき・まゆみ
 20番 横山利美 よこやま・としみ
 21番 若里美鈴 わかざと・みすず

以上42名

・岩元伸男
いわもと・のぶお

担任教師

・闇口久萌子
やみぐち・くめこ

“プログラム”担当

教官

死愛解始 4

4

「それではこのゲームの細かいルールを説明します。」

闇口はにんまりとした顔でそう言い、くると黒板のほうを向いた。そして、あたかも書きなれたように、正方形が網目状に並ぶ図を黒板に白いチョークで

描いた。そして、その左端の正方形の列の中に、上からアルファベットをAから順番に書き入れた。そして、一番下、アルファベットのJまで書くと、今度は一番上の正方形の横の列に、左から数字で1、2という具合に書き込んだ。

そして、右端のマス 10まで書き込むと、その網目状になった模様の中に米粒に似た形の 勿論その大きさは違うのだが 図を描いた。

「はい、今皆さんがいるのはこんな感じの所で、N県の沖に浮かぶ島です。広さは半径およそ1キロくらいで、前に住んでいた人たちには出て行ってもらっているので私たち以外は誰もいません。」

それでようやく浩也は、ここが三浜沖に浮かぶ島々の1つであることが分かった。成る程、ここが会場つてわけですか。

「いいですか、続けますよ。」はい。それでこのゲームの内容は簡単です。先ほども言ったように1人になるまで殺しあってください。これから皆さんに外へ出てもらうだけけど、それからは基本的に何をしてもOKです。建物の中にも入れるし、隠れて待つってのもいい手かもしれないな。」

その闇口の言葉で、浩也は誰かがほっとため息を着いたような気がした。そう、殺し合いをしないで隠れている。これほどおいしい手はないだろう。しかし、それは次に発する闇口の言葉でもろく崩れ去っていくのであった。

「はい。でも、私たちがそんなことはさせません。いつまでも隠れられてたら、殺し合いにならないもんさ。そこで私たちは、黒板に書かれているようにこのような網目状のエリアを設けました。このエリアが何かと言うと　はい、そこで皆さんに着けてもらっているその首輪です。」

闇口の言葉で、クラスのほぼ全員が自分の首に目をやった。そして、当たり前かもしれないが、言われて初めて気付いたやつが多く、その首に着いた銀色の輪を見てやや驚愕した顔になっていた。

「はい。その首輪は何かといいますと我が大東亜共和国政府が開発した高性能の三系統システムを積んだもので　あゝこらこら、やめろ外そうとするな。外れない外れない絶対に外れない。それにも無理に外したら　」

ここで闇口はちよつと息を吸い、

「爆発するぞ！」

と言った。

それで首輪を弄っていた何人かの生徒たちが慌ててその首輪から手を離れた。

「いいかゝ。続けるぞゝ。その首輪は耐熱、防水など、あらゆる面に当たっても壊れない

丈夫なシステムが積んであります。それでゝ、その首輪は　」

闇口はそう言いながら再び黒板の方を向いた。それで、白いチョークを握り、先程描いた“網目”の1マスを、そのチョークでどんと示した。

「はい、先生たちはこの教室に残って皆さんが殺しあうのを見守るわけですが、そのゲームの最中の午後午前の六時と零時に　そうだな、一日に四回放送を流します。それで、その放送でだな、例えば3時からこのE-4エリアが危ないぞゝと言います。はい、そしたら3時までには急いでそのエリアから立ち去ってください。そうしないと皆さんにつけてもらってるその首輪が　ぼんっ！」

急に大きい声を闇口が出したので、生徒のうちの何人かはびくっ

と反応した。

「と爆発します。穴を掘つても木に登つても無駄です。ああ、死んじゃった人は関係ないよ。生き残っている人でな。それから24時間たつても死者が1人も出ない場合は、その時点で生き残っている人全員の首輪が爆発します。優勝者はありません。ですからそんなことにはならないように、元気に戦ってくださいーいね。」

浩也は心の中で唾を吐いた。

「ああ、あとそれからこのエリアだけは別です。えーとああ、この位置書いてなかったつけ？はい、この教室、まあ言ってしまうは皆さんがいるここは分校なんですけどー、ここの位置はエリアで言うとG-6、まあ島の中央よりやや南よりのところですよ。それでこのエリアだけは特別で、これから順番に教室を出て行ってもらわねえんだけど、最後の人が出発してから20分後に禁止エリアになります。ですから、この分校からはなるべく離れたほうがいいですね。」

浩也は心の中で毒づいた。あんな、成る程。つまり、自分たちが殺されちゃたまらないのでそんなことをしているわけですね。おそらく、これから私たち生徒に武器が支給されるわけですから、そんなもんで奇襲されちゃばいでもね。でも、その20分の間に皆が協力して責めればこっちの勝ちじゃあないですか？

しかし、勿論浩也はそんなことが起こるのは超低確率なことだと分かっていた。クラスメイトが3人も殺されたこの状況でそんなことが起こりうる可能性はゼロパーセントに近い。そう、かのナポレオン皇帝の辞書に”不可能“と言う文字を書かせるのと似たようなことだ。

「それにー逃げようたつて無駄です。この島の周りには政府の船が数隻待機しています。」

その船が逃げた人たちを撃ち殺します。」

浩也は心の中で呻いた。畜生、認めたくはなかったが、よく出来た

クソゲームだ。

「はい、細かいルールはざっとこのくらいです。それでは今から確認します。皆さんの机の中に紙と鉛筆が入っていると思います。はい、出しなさい、出しなさい。」

その声で教室にプリントを提出するときのような音が生まれた。浩也も仕方なく、机の中のそれらを取り出した。どういわけか、紙の質がやたらに良かった。

「はい、その紙に鉛筆で書いてください。『私たちは殺し合いをする』はい、これを三回書きなさい。」

今度は教室に鉛筆が机を叩く音が広まった。畜生、まるで授業のようだ。とんでもない授業。こんな授業、あの長髪の先生だって、グレートな先生だってやらない。

「はい、『やらなきゃやられる』これも三回書きなさい。」

浩也はふざけた担任に怒りを覚えながらも、その紙にそのふざけた文字を書き殴った。

ああ、しかし、畜生、いつかこの鉛筆を、あいつの心臓に突き刺してやる！

【残り39人】

死愛解始 5

5

「はい、それでは今から一人ずつこの教室を出て行ってもらいます。」

闇口がそう言うと、ルール説明の間ただ人形のように突っ立っていた三人の兵士たちが

素早く教室の入り口の方に歩いて行き、その扉を開けると、闇口に呼ばれる前に既に用意していたのか、ショッピングセンターで店員がよく押しているような台車を教室の中に引き入れた。その台車の上には山々とデイパックが積み上げられていた。

「はい、では今から皆さんに一つずつこの荷物を渡します。ここを出て行くときに渡すからな。え〜とこの中には多少の食料と地図、それに武器が入っています。入っている武器はそれぞれ違います。銃や刃物とは限りません。まあ、あといろいろ入っているけど各自確認して下さい。上から適当に渡すので、どれが誰にいくかも分かりません。」

これで皆さんの不確定要素、え〜とつまりどちらに転ぶか分からない要素を増やすわけです。あと、女の子もいますんで、机の脇に掛かっている自分の荷物も持っていて良いからな。教室を出たら速やかに外へ出て下さい。廊下でうろろしている人は撃ち殺します。」

いよいよか……。浩也は思った。これまでテレビや教科書で“プログラム”のことは知っていた。しかし、今回は自分でそれを体験するのだ。重い空気が浩也に押し掛かった。

「えーと、では名前を呼ばれた順に教室から出て行って下さい。といつてもまあ、私が適当に最初に出発する人を呼びますので、例えば女子21番ならあとはそこから男子1番、女子1番、2番の男子、という風に出て行ってくればいいです。そうですね、では、選

ぶの面倒だから男子1番の人から出て行って下さい。男子1番、吾妻和磨君。」

名前を呼ばれた吾妻は物静かに、すっと席を立った。脇にあった自分の荷物　　どういいうわけか黒いキャスター付きの旅行バックを片手に、前に歩いていった。浩也は座りながらも改めて吾妻和磨を目に入れた。白く、しかしその中にも青が混ざった、襟足ぐらゐまである髪。その下の端正な顔立ち、透き通るような温かみの無い目。今まで思っていた以上に背が高い。転校生。

吾妻は兵士からデイパックを受け取ると、そのまま教室をあとにした。廊下にコツコツという、恐らく吾妻の靴が床を叩く音が微かに聞こえ、やがてそれも消えていった。

「はい、では今から2分間のインターバルを置きます。次は女子1番の赤神陽子さんな。」

浩也はその言葉を聞いて咄嗟に陽子の方を見た（優もそれに気づき、浩也に心配そうな顔をしたが、今の浩也はそれには気づかなかった）。

陽子はその闇口の声に、その小柄な体を少し震わせ、しかし目はしっかりと闇口を捉えていた。

陽子は大丈夫だろうか。浩也は急激な緊張に襲われた。この状況の中でも、陽子が自ら勧んで殺し合いに参加するとは思えない。しかし逆に、陽子は襲われたら自分の身を絶対に守れるとは思えなかった。ましてや今、外にいるのはあの吾妻和磨一人なのだ。もし、あいつがやる気ならば、最悪、もうゲームに乗る行動を実行しようとしているならば、陽子はいとも簡単に、殺されてしまう。とてつもなく、まずい。

「はい、2分経ちました」。それでは赤神さん、出発してください。」

闇口が相変わらずへらへらとした口調で言った。あっという間の2分だった。

陽子は席を立ち上がり、自分の荷物の黒いサイドバックを持って、

教室の前に来た。

そして　　突如、浩也たちの方を向き、言った。言ったのだ。

「皆、私は殺しあう気はないよ。私は皆もそうだって信じてるから！！」

言った陽子に、後ろにいた“鱈子唇”が銃を向けた。それを見た瞬間、浩也は頭に赤いものが過り　　思わず立ち上がって叫んでいた。

「てめえ！赤神に手を出すんじゃないねえ！！」

直後、浩也は自分のこの行為がどれだけ愚かしいことが気づいたが、構わなかった。それは勿論、先ほどの邦宏たちの件でも、同じ状況だったから。人のために犬死になったから。その二の舞になる。だが、鶴本浩也。性格、愛しいものが傷つけられた場合、それが未遂であろうと許さない。この基本的人間感情が人一倍高い。だから、構わない。陽子の発言だって、愚かしいことではあったが、本心ならばそれでいい。浩也は思った。

しかし、場違いだけれど、これじゃあクラス全員に自分が陽子に気がある、と言ってしまったも同然かもしれないな。でもまあ、いいんじゃないですか？修学旅行にはそう言った暴露大会がつきものでしょう。たとえそれが馬鹿正直且つ大規模であつても。

案の定、その声を聞いた“鱈子唇”は、即座に狙いを陽子の頭から浩也のそれへ変えた。闇口も、気まぐれなのかそれを制さなかった。浩也はぎゅっと唇を噛んだ。

しかし、そこで「センセーちよつといいですか？」という冷静、というよりは少しへらへらした声が聞こえてきた。途端、兵士の注意が浩也から反れた。

闇口の視線もその男　　草薙照雄に向けられた。照雄が挙げていた手を戻し、言葉を続けた。

「あのー、これ以上先生たちが生徒殺すのやめてもらえませんか？これは僕ら3年B組が殺しあつて、その得たデータに意味があるわけでしょう？我らが將軍様だつておっしゃってるじゃないですか。

“プログラム”は我国を醜くも滅ぼさんとする輩を制圧するための戦闘シミュレーションである　　って。」

闇口はそれを黙って聞いていたが、末、にやりと笑い照雄に言い返した。

「うゝん、君は草薙君だったかな。面白いこと言うねゝ。そこまでこの国の方針をすらすら言えるなんて大したもんだ。うん、でもさあ。なにも一人や二人ぐらい良いんじゃないかゝ？赤神さんの今の発言はあまり良いものじゃあなかったしなあ。」

「それに」

照雄が無理矢理、闇口の言葉を堰き止めた。

「僕はこういうゲームの場合、必ず獲物を決めるんですよ。それで、まあ赤神さんだったら

可愛いし？こう、やっちゃってから殺す、なんてのも良いと思いまして。それに鶴本君だって

残り少ない人生をせいぜい楽しんでほしいですしね。ですから、まあこっからは僕らに殺しの方は任せてくださいよ。」

教室がその言葉でどよどよと叫んだ。しかし、それを全て打ち消すような闇口の笑い声が部屋中に響き渡った。

「あゝそうかそうか、わかった。いやあ嬉しいなあ。君のような生徒がいて良かったよ。よし、じゃあ、鶴本と草薙君は席座って、赤神さんは荷物を持ってさっさと出て行って下さい。

はいはい、後が痞えるから早く出て行ってな。」

陽子は促されるままに教室を去っていった。

「はい、じゃあどんどんいきましよう。次　　」

闇口が続ける中、浩也は急に力が抜け、すとんと席に着いた。

握っていた拳の平、汗がびっしょりだった。続いて照雄の方を見た。無論、浩也には先ほどの照雄の発言は陽子と自分を守るためのものだと分かっていた。照雄は浩也に気づき、右手を出し、中指を立てた。本来はあまり良い意味ではないが、それは照雄がいつも、ちようどピースのような感じで出すものであり、悪い感じはなかった。

ほんとに、ありがたかった。優も、あんまり無理するなよ、と浩也に言ってきた。

それから前後して、鮫島や、浩也の前の席の武村千鶴が教室を後にした。そのなか、浩也は後ろの不良グループがなにやらメモを、闇口たちに気づかれぬように回しているのを見た。恐らく、発信源はリーダーの矢吹克弥だろう。待ち合わせの場所か、何かだろうか。

浩也も何かメモを残そうかと思ったが、照雄は席が遠かったし、優には直接出るときに口で伝えればいい。

他に、信用の置ける奴と言ったら誰だろうか。陽子には申し訳ないが、浩也はこのクラスの全員が、ゲームに乗らないという確率は低いと思っていた。誰か一人ぐらいは、やる気になるかもしれない。そして、そんな状況でも信用できると言ったら、陽子と同じクラス委員の長谷川健あたりであろうか。彼はクラスの誰に対しても親切だし、正義感が強く、信頼性はある。

他には陽子の友人の向井田美紀や若里美鈴（女子21番）あたりであろう。特に美紀は、その男勝りの性格のせい、クラスでも男女問わず付き合いが広い。

それに、他にも菅原大輔や淀倉塔次など、信頼できる奴は、いる。おーけい、大丈夫。この狂った状況をなんとか乗り越えてやる。

「はい、次　　おっ、来たな」問題児。男子12番、鶴本浩也
「でてこーい。」

その闇口の声を聞いて、浩也はがたと席を立った。そして、隣に座っている優を見、心配そうに見ている優に「外で待ってる」と小さな声で言った。

優は頷く代わりに、これもまた小さな声で言った。

「無理はするな。気をつけろよ。浩也。」

それで浩也はわずかに間をおき、頷いた。そして、脇に掛けてあった自分のスポーツバッグを取り、ずんずんと前に進んだ。

教壇に来たところで、兵士が渡そうとした荷物を強引に受け取り、

闇口の顔を見据えた。

闇口がそれで、浩也に微笑んだ。

「お、良い目をしてるじゃないか」鶴本。なんか先生、女の勘で分かるんだが、お前の中には

さっきの覇気といい、素質があるよ。もしかしたら一番の大量殺人者、なんてことにもなるかもな。」

浩也は闇口の言ったことが実際に思ったことなのか、自分をからかっているだけなのか分からなかったが、どちらにしたって、それは嫌な事だ。面倒ごとは起こしたくなかったので、

それで闇口の顔から目をそらし、教室の扉に向かって歩いた。去り際に闇口が「まあいいさ、お前には期待してるぞ。」と言ってきたが、これも無視した。そして、まだ優たちが残っていることを思い、教室に未練を残し　しかし速やかに立ち去った。

【残り39人】

出発深降（出発進行）

8

浩也が教室を出てまず分かったことは現在の時刻がまだ夜のそれだということだった。

というのも、教室を出た廊下は薄暗く、明かりと言えばたった今出てきた教室から漏れる、

あの蛍光灯の光ぐらいだったからだ。いや、この校舎の窓全てに鉄板が貼られていて、バーベキューのオンパレードをしようというのなら話は別だが、それなら月明かりも何も届かず、

この廊下を歩くのも不可能であろう（しかし、それはそれで闇口には面白いのかもしれない）。

何も見えなくて廊下を彷徨っている生徒たちを次々と射殺する。はい、廊下でうろろろしている人は撃ち殺しまーす。くそ、冗談じゃない）。

浩也は歩を進めながら、分校を出てからのことを考えた。

まずは後から出てくる優を待っていることだろう。（いや、クラスメイトが全員このゲームに乗らず、皆で話し合って分校のすぐ外で自分を待っているというのなら話は別だ。しかし、そんなことは先程も思ったように、ありえない）。

それに、運がよければ照雄が外で待っていてくれるかもしれない。そうすれば3人で他のクラスメイトを説得することもできる。

問題は 赤神陽子に無事会えるかどうかということだ。既に殺されてしまっているとは考えたくない。しかし、それでなくとも今は分校をかなり離れてしまっただろう。それに、自分だっていつ誰に襲われるか分からない。無事、再開できるのだろうか。

しかし、そのようなことを思っても、とりあえずここを出なければ話にならないのは分かっていた。優と合流する前に政府の鉛弾でゲームオーバーなんてのは、まっぴらだ。浩也は歩くペースを速め

た。

校舎の中央まで来ると浩也の左側に昇降口が現れた。ここが出口だろう。

浩也は少し躊躇したが、心を決め、月明かりで青白く照らされた地面の方へ歩を進めた。

敷居を跨ぐと、目の前に校庭が広がっているのが目に入ってきた。分校と言うわりには比較的大きな校庭で、辺りは薄暗かったがその両脇にはサッカーゴールの存在が確認できた。それで浩也は小学校のサッカー時代が頭を過った。だが、今はどうでもいいことだ。そのゴールから目を離し、さらに遠くを見回した。左側、遙か遠くに黒く、所々がキラキラしたもの　海と確認できた　が見え、反対、右手には小高い山々が聳えているのが見えた。そして、校庭の周りには雑木林が広がっており、新たな闇を作り出していた。

浩也はふう、と息をつき、再び　今度は先程より慎重に　校庭を見渡した。

誰もいなかった。そう、皆は後から出てくる生徒を待たず、出発してしまったのだ。赤神陽子も、草薙照雄も。

浩也はまた息をついた。今度はため息に近かった。やはり、現実
は厳しかった。仕方なく、とりあえず浩也は校庭に降りようと脚を
上げ　途端、その足を止めることとなった。

左側のサッカーゴールに、先程は確認できなかったのだが、黒い
何かが落ちていた。

浩也は何だろう、と思い、やや急ぎ足でその物体に近づいた。最初
は誰かが慌てて荷物を落としたのだと思った。が、近づき、その物
のラインがはつきりするにつれて、浩也の鼓動が速まり、それに歩
みが比例した。まさか、まさか

そして、そのものが何なのかをすっかり確認したときは、浩也は
それに向かって既に走り出していた。

その物のすぐ近くまできて、足を止めた。そして、息を呑んだ。
死体だ。紛れもない死体だったのだ。自分の2分ほど前に教室を

出て行った、津堂百合栄（女子１１番）だった。セーラー服を纏った体がうつぶせになっていて、首だけ浩也の方を向いていた。普段は彼女のメイクセットによってきちっと梳かされた長い髪は、今はもはやお化けのようにあちこちに乱れている。そしてその頭　左こめかみのすぐ上が陥没していて、恐らく明るいところで見れば、その部分は彼女の白い肌とは対照的にブズに染まっているはずだった。左の眼が異常に飛び出していて、右眼とは別の方向を見ていた。そして額と鼻からは血　が流れ出していて、その肌を染めていた。酷かった。

しかし、浩也の感情を占めたのは百合栄の死体の凄惨さよりも（百合栄には申し訳ないのだが）早くも“プログラム”の犠牲者が出た、という驚愕だった。

そんな　ホントに、もうやる気の奴がいるのか？浩也は思った。いや、例えば極端に怯えた生徒が咄嗟に殺してしまった、という可能性も十分にある。だが、困ったことに　百合栄のデイパツクが見当たらなかったのだ。少なくとも、その死体の近辺には。怯えている者が、これもまた咄嗟に持っていた、とも予想でき、または殺した奴とは別の誰かが持っていた、とも考えられるだろう。しかし、浩也はそれはイコールやる気になりかけている、と判断した。恐らく、そいつがその時怯えていたとしても、殺した相手の荷物を持っていくという行為ができるならば、そいつは後にやる気になる可能性が高い。それにそうでなくても、死体を見つけたのに荷物を持っていくということは、武器を求めて持ち去った奴という可能性が高い。

浩也は急に、まずい、と確信した。自分はこんな無防備でカムフラージュするものも何もない校庭に突っ立っているのだ。もし、やる気の奴がまだ近くにいれば、狙われる。

浩也はとりあえずどこかに身を潜めよう、そう思い、歩き出そうとしたその時

「鶴本・・・」

この声を耳にした。浩也は半ばとび上がる様にそちらを見た

【残り38人】

中盤戦1 脱線

浩也が見た先には、学生服の男子 瀬戸茂（男子10番）が立っていた。

突然の他人の出現に心臓がばくばくしていたが、浩也は声を落착かせて言った。

「瀬戸かあ、驚かすなよ・・・。」

「あ、ごめんよ。俺・・・怖くて、教室を出てから急いで分校を離れようとしたんだけど、後にお前が出てくるのを思い出して、戻ってきたんだ。す、優もまだ、中にいるしさ・・・。」

茂は優とクラブ活動が一緒だということ、優を通して浩也も親しい方だった。余談だが茂は3年になった現在、慧馬中のキーパーとして活躍している。だが、浩也は足元に百合栄の死体が転がっている今、茂に対しての警戒の意は怠らなかった。

浩也の内心が表情に出たのか、茂はそれで少し心配そうな顔をした。それで、急いで浩也に言った。

「だ、大丈夫だよ。俺は殺しあう気なんてないからさ・・・。」

そう言っ、茂はデイパックの中から 恐らく支給武器というやつであろう、刺身を捌く鋭利な刃物 出刃包丁を取り出し、それを地面にあたふたと置いて、さらに両手を挙げた。

足元の死体、やる気の奴はいる。だけど

目の前の茂の行為を見て、ほんの少しの警戒を置いたが、浩也は胸を撫で下ろした。

茂は、そんなことはしないと、そう思う。

「こ、これで信じてくれるか・・・？」

茂が恐る恐る浩也の顔を伺って言った。その茂に「ばか、なに言っただ。信じないわけないだろ。」表は、そう言った。それで茂がああ、良かったー。と息をつき、再び浩也の方を見た。

「そ、それでこれからどうする・・・？」

問いかけた優に浩也はこう言った。

「とりあえず、優が分校から出てくるのを隠れて待とう。行動はそれからだ。」

それで茂が「あ、ああ、そうだな・・・。」と言い、ややぎこちなく微笑んだ。浩也もそれで頷いて

突如、ひょうつという音が浩也の耳に届いてきた。なんだ、と思う間もなく、

瞬間、どつっという鈍い音がして、浩也の眼前ぎこちなく微笑んでいた茂の鼻頭から何か銀色の棒のようなものが、突然成長した植物のように生えていた。

な！？

浩也は突然の事態に口をあんぐり開け、しかしその棒状のものが何か、分かった。その鋭利な、本来なら銀色の先端には、茂の赤い血がべつとりとついていていた。間違いなく、“矢”だった。

刺さったシヨックからなのか、茂の両眼はぐるりと天を眺めていて、それをすぐ隣から吹き出た血がピンク色に染めた。しかし、その変形した顔も、茂の体が倒れるのとともに浩也の視界から外れていった。

茂がどおつと地面に突っ伏し、そのままぴくりとも、いや、一回ほど、筋肉の痙攣なのか、びくんっと動いたが、以降は動かなくなつた。

驚愕しながらも、浩也は矢の飛んできた方向　つまり茂の背後、自分のまっすぐ前　を見た。

学生服を着た男が立っていた。顔は暗くてよく見えなかったが、その手には弓を横にし、トリガーをつけた滑稽な武器　しかし、そのコツケイな武器は見事に茂の頭部を射抜いたんだぜ？敵ながら天晴れじゃ　いわゆるボウガンというものを構えていることは分かった。

そしてそれを確認した瞬間、浩也は自分のデイパックとスポーツバッグを背中に担ぎ、それらを盾に校庭の端にある茂みに向かって

走り出していた。

サッカー現役時代の俊足は衰えてはいなかった。そりゃあそうだ、こんなこともあるうかと、というわけではないがサッカーを辞めてからもトレーニングは欠かさなかったからな。

ぐんぐん茂みに近づいていく・・・。

しかしそれを追うように再びひょう、という音が聞こえ、次の瞬間浩也の背中にとちよつとした。矢がデイパックに刺さったのが分かった。しかし、それで痛みは感じられなかった。恐らく、デイパックの中の何か硬いものに当たったのだらう。

それも跡目に、またひょうつとの音。しかしその時には浩也は半ばラグビーのトライよろしく茂みに飛び込んでいた。

急いで近くにあった木に隠れ、浩也は素早く今自分が走ってきたルートを振り返った。

ボウガンを構えた男子生徒の顔を今度はしっかりと捉えた。

短く刈り込んだ頭、陸上部で鍛えた筋肉質の体つき。田口孝則（男子１１番）だった。

それを確認したときには浩也は再び走らなくてはならなかった。

孝則がこちらを見て、追ってきた。

浩也は一瞬、優がまだ分校の中にいるのを思い出し、走るのを躊躇したが、しかし自分がその前に死んでしまつては　ああ、一体何度同じことを自分に決意させているのだらう、いや初めてなのか？分からない　元も子もない、そう思い、そして優や後から来るものを危険に晒せないように、その足を雑木林の奥へと走らせた。

孝則との距離がどれだけあるのかは分からなかったが、ただ林の中をジグザグに走りぬけた。

走って、走って、走って走って走って走って走って

不意に足に込めた力が空回りした。それは足元の、ある茂みを強引に通り返けたとき。浩也はすぐに気づいた。そこは、傾斜になっていたのだ。それは崖というような急なものでもなかったが、不意を突かれた浩也は、その坂を勢いよく転げ落ちた　。

【残り37人】

中盤戦2 二兎を追うは兎に喰われる

一方、田口孝則（男子11番）は浩也が雑木林を駆け巡っているときには、茂みに

入ったその足を既に止めていた。夜のため、雑木林の中は一層闇に包まれていて、浩也が

着ていた学生服の上着の黒も手伝って、視覚的に追うのは不可能になった。要するに浩也を見失ったのだ。

はあ、ハア 息を落ち着かせようとした。 クソ、冗談じゃねえ！

孝則は分校を出た後、浩也が考えたように、とりあえず近くの茂みに隠れようとしたのだが、校庭の近くでは危険だと思い、浩也が飛び込んだ雑木林とは反対の方角のその奥へひとまず足を運んだ。そこでデイパックを開け、中のボウガンを手にして、校庭に戻って来たのだった。そこで目にしたのは向かい合う二人の学生服姿と、その足元に横たわったセーラー服の女子の死体（だと確認できた）だった。

そこで孝則は思った 二人がかりで、一人の女を殺したのか？ 否・・・そういうことにしよう。そう勝手に決め付けたのだ。

浩也の姿が消えてから、孝則の頭を最初に過ったのは、暗闇とはいえ運動部に所属していない浩也に足の速さで抜けなかったことへの屈辱感だった。体育の授業で行った50メートル走で、浩也がなかなかの速さを見せていたことは分かっていたのだが、それでも孝則は陸上部の名ランナーという肩書きがあつて、このクラスでは最速だと、どこかで勝手に信じて疑わなかった。

練習メニューである校舎周り20週ランニングの時などに、たびたび放課後の教室を覗くと

あいつ、草薙や他の女子たちと楽しそうに喋ってばかりだ

ったクセして……。

実際は、鶴本浩也は自分でも自覚せずにだが、帰宅時に走ったり、休憩時間などの運動で現役時代の運動能力を一般人の目から見れば少しは保たせていたのだが、無論孝則はそのようなことを知る由もなかったし、何よりそのどこかでの浩也に対する嫉妬心がその真実の想像を妨げていた。

故に、その嫉妬心も含めて、孝則は鶴本浩也を消したい。そう思った。瀬戸茂の殺害はあくまで前奏で、死体が横たわる状況はただの、自分への理由付けと自己満足でしかなかった。しかし、逃げられた。

いやいやいや、そうじゃないそうじゃないだろオレ！そんなことは二の次だ。今は

次の感情が頭に入ってきた。そして、既に熱っていた背中に、じつとりと脂汗が染み出し始めた。

テーマは同じだった。『鶴本浩也を生きて逃がしてしまったこと』。今度は屈辱感でもなく、劣等感でもなかった。ようやく、孝則の頭が“プログラム”において働くようになった。

このテーマは何を意味するのか。

あいつを逃がした結果、もし、あいつが仲間（そう、渡辺優などだ）と出会ったら……オレがやる気になっている、と伝えるだろう。そうしたらそいつも敵になる……。いやいや、例え仲間でなくともあいつが誰かと出会えば、それだけオレの敵は増えることになる！

テーマは同じだった。屈辱感でもなかった。劣等感でもなかった。まさしく、恐怖、だった。

ま、ずい。まずいますまずいますずい！ 落ち着かせようとした息が逆に荒くなってきた。 クソ、ジョウダンジャネエ

しかし、それは気づくのが遅かった。浩也は闇の中に消え、今自

分は闇の入り口に突っ立っている。ただ、焦って茫然と、していた。時間ばかりが、経過していた。

「きやああああっ」

突如、悲鳴があがった。孝則の後ろからだった。すぐさま、振り返った。

孝則が先程は目にもくれなかった百合栄の死体の横、比較的小柄な体にセーラー服を纏ったおかつぱの女子がいて、こちらを見ていた。デイパックを両腕で抱えている。誰なのかすぐに分かった。浩也の2分後、インターバルを終えて分校から出てきた徳川歩美（女子12番）。

当然だった。何時人が出てきてもおかしくない場所にいたのだから。しかし、それは孝則の思考回路を侵し始めた。いや、触媒となったのかもしれない。つまるところ、徳川歩美は二つの死体を見て、オレがやったと思うだろう。そして、オレを警戒するだろう。という考えを起こさせたのだ。

畜生、徳川・・・あいつもオレから逃げて、他の奴らにオレがやる気だと伝えるか？ごめんだ。もうごめんだこれ以上厄介ごとが増えるのは！なら、逃がさない、殺してやる！

孝則は下ろしていたボウガンを再度構えた。そして、トリガーを

引いて、何も発射されていないと感じた。

しまった！矢を忘れてた！くそ、焦りすぎだ！なにやってんだオレ！

矢！矢をつめないで逃げられてしまっ！そうだ、焦るな。相手は女じゃねえか。

簡単に殺せるさ。ひやは、ひやはははははははは

ひゅんひゅんひゅんと風を切る音が突如し、孝則の首と肩の辺りに冷たい重いものが勢いよく巻きついた。思わずぐっとうめき声をあげたが、次にはその冷たいものに力を掛けられ、前のめり

に地面に倒れこんだ。額の皮が聊か剥けた。

な！？孝則は予想外の出来事にさらに驚き、思わず顔を上げた。

徳川歩美が、目の前に立っていた。美しい、しかしとても怪しい目で、孝則を見据えていた。

「残念ね、田口君。焦りは禁物よ？」

その一言だけを告げ、歩美は冷たく重いつまみ、その先端についでいた鎌を、振り上げた。

ひ、ひ、この女・・・なんなんだ、くそ、やばい、やば

どつつという鈍い音がして、孝則の脆い思考回路はそこで停止した、否、破壊された。頭の旋毛辺り、そこに生えた鎌の根元から、血が滲み出した。歩美が鎌を引き抜くと、血がぷしゅっとマグマのように噴き出た。刃先が脳を貫き口内まで到達していたらしく、そこからも赤がとろとろと流れた。

歩美は右手に握った彼女の支給武器　鎖鎌　の刃に付いた血液を振って掃うと、孝則が倒れざまに話したボウガンを見た。

あーあ、壊れちゃってる・・・これじゃあ矢を飛ばせそうもないわね・・・

それにしても、田口君、もう少しあなたは戦闘能力があると思って、油断させて殺そうとしたのに・・・まったく、その必要もなかったわね・・・

それから茂の死体の方へ足を進めた。そこに投げ出された出刃包丁を拾った。

ま、無いよりは良いわね。小回りも効くし、もらっておこうかしら。

それでそれもデイパックに入れ　校庭を見回した。転がった三つの死体。まあ、一人は自分が殺したとしても、政府の人たちにとっては出だしはいいんじゃないかしらね・・・

やる気になってるヒトが、どれだけいるかはわからないけど、私も負けてられないわ。

校庭を後にしながら、歩美は思った。

さあ、ゲームを始めましょうか。

36人

【残り

中盤戦3 緑と赤の闇、銀の歪み

しばらく視界がぐるぐると回転した後、どんっという衝撃が体に伝わるのとともに、浩也の体は芝生の上に仰向けに転がっていた。

くっ、いててて

衝撃は、背中を打ち付けられたそれだったが、それでもすぐさま、体を起こした。幸い怪我は無いようだった。背部の痛みは、柔道の大腰で受け身を取り忘れた感じのようなもので、じきに取れるだろう、そう思い、ふらつく頭をどうにか抑えて浩也は立ち上がった。

浩也はそれから、自分が今転げてきた坂を見上げた。芝生が満遍なく生え揃った傾斜のてっぺんに、自分が気づかずに足を踏み入れた茂みがあった。

耳をすました。

あのボウガンの音は聞こえてこなかった。坂の上から、茂みを漁る足音も聞こえなかった。

孝則は俺を追うのをやめたのだろうか。

浩也はとりあえず、近くに転がっていた自分のデイバックとスポーツバックを拾うと、近くにあった太い幹の木に隠れた。

暫くしても、坂の上に孝則は現れなかった。見失ったか、諦めたのだろう。浩也は思った。

しかし 微少の安堵と共に、心に様々な重石が押し掛かった。まだ、“プログラム”が始まってから一時間も経っていないうちに、そして自分が出発してからまだ十分も経たないのに、既に確認しただけで死者が二人も出てしまった。そして、田口孝則は理由がどうにせよ、瀬戸茂を殺し、自分をも殺そうとした。やる気になっていると見て、間違いはなかった。

畜生・・・浩也は心の中で嘆いた。やる気になっている奴を、実際に見てしまった。確かに、全員がやる気ではないとは覚悟していたが、いざとなると、やはり、応えた。

本当に、躊躇無く襲ってきた。クラスメートが。

学校生活での彼を思い出す・・・

直接的な付き合いはそんなになかったが、放課後、懸命に部活に取り組む孝則を何度か見たことがあった。

「ラスト3周！ペース上げて行くぞ！」

部活に打ち込める孝則に、自分はやはり、優に対するものと同じような引け目を感じていたのかもしれない。そんな時、孝則がとても高い存在に見えた。

なのに、何でゲームに乗っちゃってたんだよ、畜生・・・

けれども、いつまでも落ち込んでばかりはいられなかった。孝則がやる気になっていいる以上、恐らくまた出会ったときには、奴と一戦交えることになるかもしれない。それに、やる気になっていいるのは孝則だけではないと思った。百合栄を殺したのは孝則で、彼女から奪ったデイパックにボウガンが入っていた、とも考えられるが、そうでない可能性もあるわけなのだから。

とりあえず　今、自分がやるべきことは、仲間を　誰か、信頼できる奴を見つけて仲間にする事だ。

それで、浩也は優のことを思い出した。出席番号順から、優の発表は最後から二番目。それならばまだ分校に残っているに違いなかった。

しかし、あの場所に戻るのは容易ではなかった。いくら振り切ったといっても、分校の周辺にはまだ孝則がうろついているかも知れない。あいつはボウガンを持っている。危険性は高かった。

だが　その危険は優たちにも襲い掛かるだろう。やはり、ここは分校に戻らなければ

ならない。浩也はそう思い、それで、気が着いた。

そうだ、自分にも支給されたデイパックがある。護身用と

して、武器は確認した方がいいだろうな。

浩也はそれで、自分の足元のデイパックを持ち上げた。

孝則のボウガンの矢がそこから生えているのを今更ながら確認できた。今、改めて見ると、やけに禍々しい印象が出ているな、と浩也は思った。

とりあえず、その矢に構わず、デイパックの口を開けてその中身を取り出した。

おおよそ闇口が言っていた通りの物が入っていた。水、パン2個、コンパス、懐中電灯、アナログ腕時計、地図。浩也はそこまで確認すると、ボウガンの矢が何に突き刺さっているのかが見えた。

それは学校で使うような、分厚い国語辞典だった。

国語辞典？もしかして、これが支給武器というやつなのか？

浩也はさらにデイパックの奥をのぞいたが、他には何もなかった。おいおいおい、確かに教室で居眠りしている奴をたたき起こすには強力だろうけど・・・これで戦えてか？

だが　浩也は突き刺さったボウガンの矢を抜き、その辞典を取り出した。　そんなことを言ってもこれは浩也を救ったといつてよかった。表紙に穴が開いたそれを見ながら思った。これに矢が当たっていなかったら　予想するまでもない。感謝だ、まった

く。
しかし、いくら救われたといっても、これを武器に分校まで戻るのは無謀だ。再び孝則に出会った場合、次もボウガンの矢を防げるとは到底思えない。今度こそ的になつてゲームオーバーだ。

優
・・・

ええい、何を迷っているんだ鶴本浩也。お前はそんな優柔不断な男だったのか？それに優に言っただじやあないか、外で待っているって。ダチとの約束を守れ、多少の危険なんかその場で乗り越えろ。

決断した。

まだ間に合う、行こう。

手早くその地図やら食料やらを再びデイパックに斯きこんだ。まだ完全に脳味噌が安定した状態ではなかったが、それもなんとか吹っ切って、浩也は腰をあげようとした。

突如、がさり、という音が聞こえて浩也の前方五メートル程度にある茂みから影が飛び出してきたのもその時だった。

！

飛び出してきたときには、影の正体が斧持恵子（女子3番）であることに気づいた。そしてその右手に鉈が握られていることにも。

鉈！

中途半端に腰を浮かせていた浩也は、直感でそのまま左に転がった。

「つつ、あああああああー！ー！」

奇声をあげて突進してきた恵子による鉈の一撃が、浩也が尻の下にしていた地面に

直撃し、細かい土や草が卷上げられた。

つ、くそ、こんな女の子まで

転げた勢いで身体を起こした浩也は、第二撃を与えようと地面から持ち上げた、恵子の鉈を持つ腕を掴みに掛かった。

女の子の腕を力ずくで握るのは、普段ならルール違反だが、今はそんなことは言ってられない。浩也は場違いにどこかでそう思った。左手でまず鉈の柄を握り、右手で彼女の両腕を握る。

「いやあ！放せえ！」恵子は浩也を見ずに叫んで、体を腕を滅茶苦茶に動かした。

「落ち着け！斧持！俺は人殺しなんてしない！」

「嘘だっ！！ウソだウソだああ！！」

浩也は説得しようと試みたが、恵子は聞く耳を持たない。

「嘘じゃない！俺は決めたんだ！仲間を集めるって！みんなで助け合えばこんな状況でも逃げられる方法が見つかるんじゃないか！？」

浩也は先程決めた自分の思想を叫びで述べた。

「信じられるもんか！」

恵子が叫ぶ。

「バカにしないで！何が仲間を集めるよ！皆を集めたら、その武器を奪って、油断してる皆を殺すつもりでしょ！あんなみたいな奴の考えてることは見え見えなのよ！どうせ銃とか持つてるんじゃない？油断した私を撃つんだわ！殺される前に殺してやる！みんなみんな、信じない！！」

言い切られた。

言葉のキャッチボールは、とても上手くできていなかったが、恵子が自分とは逆のことを思っているのは、わかってしまった。

・・・そんなことない！と言おうとした瞬間、浩也の手が振り払われた。いつの間にか力を入れていなかったのだ。

一旦下に振り下ろされた鉈は、そこから斜め上に軌道を変えた。つまり、浩也めがけて。

目の前を、鉈の刃先が掠めて、後ろに過剰に避けた浩也は、そのままよろけてバランスを崩し、草の上に尻餅をついた。

ハア、ハア、ハア

それは、どちらの呼吸だっただろう。

目の前には、鉈を持った、やる気の奴、がいる。

血走った二つの眼が、どんな状態になっているか分からない自分の目を見据えていた。

もう、やめるんだ、とかそんな言葉は一切発せなかった。

何でだよ、何でみんな……やる気になっちまってるんだよ！！

心のどこかで、空耳がきこえた。

（何ありきたりな疑問抱いてんだ？ 答え、もう知ってんじゃないのか？）

「死ぬ。」鉈が振り上げられる。

目を瞑った。

ぱん、という乾いた音がして、「ぎゃあっ！」と悲鳴があがった。目を開けた。そして、さらに浩也は瞼を上げることになった。

目の前にいた斧持恵子の手から、鉈が零れ落ちていた。

いや、そもそもそれは“手”と呼べるのか分からなかった。恵子の鉈を握っていた右手からは、赤い液体に塗れていて、親指と小指が薬指の一、二本しか残っていなかった。それもすぐさま恵子の左手で覆い隠され、見えなくなった。

「ああああああああっ！ いいいい痛い！ 痛いいいっ！」恵子は叫び、屈みこんだ。

何も言えなかった。浩也はそれをただ茫然と見ていた。

恵子が右手を自分の眼前に出したので、浩也の視界に再び“それ

”が入ってきた。

「手！手！私の手がっ！！」恵子が言葉とは思えないような口調で言う。

そんな時だった。恵子より後ろに、浩也が第三者の介入を確認したのは。

自分が転げ落ちてきた坂から、銀色の髪をした女子が降りてきてこちらに近づいてきた。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ

彼女は歩いてくる。

その銀髪の間から覗ける美しい眼は、醜く歪んでいた。

笑顔だったのだ、彼女は。

ざっ、ざっ、ざっ、ざ。

鳴咽を漏らす恵子から少し距離を取って、足を止めた。そして、
「うふふふふっ」高らかな声でその感情を表現した。

その右手には拳銃がある。

そこまできて、浩也はようやく、彼女が横山利美（女子20番）であることを認識した。

当然だった。クラスや学校では勿論、慧馬町の中学生の中で、こんな色に髪を染めているのは一人しかない。

その声に、恵子がぴくりと反応した。顔からの全ての体液を流しながら、利美の方を向く。

「あんたが・・・私を・・・?!私の手を・・・!!」震える声で恵子が言った。

「あら、悪かったわねえ。」利美が笑う。反省とか謝罪とかは、一切含まれていない言葉だった。ただ恵子を見下す様な、そんな口調。それは、もともと擦り切れていた恵子の理性の袋を破るには十分なことだった。

「あああああああああああああああああああああ
あっ！！」

恵子は激昂した。先程より大きく、狂ったように叫ぶ。

そこからはビデオのコマ送りのように、浩也の目には映る。

恵子が、無事な左手を落ちていた鉈に伸ばし、掴むと同時に立ち上がり、振り上げ、利美に向かって走り出す。利美は、ふう、と息をつく、右手を斜め下　恵子の忙しく動く脚が来るそこ　に伸ばし、人差し指を2度、曲げた。

恵子が前にのめり倒れる。再び絶叫する恵子。そのスカートから覗いた脚に、赤い血が滴る。血、血、血

数秒のうちに、浩也の前でそれは流れていった。

「・・・最初はちゃんと頭を狙ったつもりだったのに。」

【残り36人】

中盤戦3 緑と赤の闇、銀の歪み（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

かなり定期が悪い更新となっていてすみません。
お暇でしたら、どうぞよろしくです

中盤戦4 宣戦布告

「斧持っ！」

浩也は思わず恵子に駆け寄った。

「うっ…うっう、うっ」

恵子は呻き声をあげ、地面に蹲って両足を押さえている。

背後にいた浩也は、彼女のスカートの裾近くに二つの穴が開いていて、そこから血がこぼれつつけているのが見えた。弾はどちらも足を貫通しているようだった。

「あらあら、優しいのねえ、鶴本君たら」

場に合わない声が降って来て、浩也は強制的に冷静さを戻された。浩也は声の方を睨みつけた。

距離的にもう眼前と認識しても良かったそこには、たった今恵子の足を奪った少女が立っている。銀色に染めた髪は、微かに流れる風になびいている。深い笑顔をつくっていて、堕天使を連想できた。「ゲームの敗者になるヒトを、助けようとするなんて」くすくすと銀色が笑う。

「……なに？」浩也は、ようやくと反応する。「なに、言ってたんだ？ お前……」

「あら、なにムキになってるの？」誘うように利美は言う。

「なんで、平然とクラスメイトを撃って、それで、ゲームの敗者とか言ってたんだよ？」

言葉を組み立てるのが、上手くできなくなっていたが、浩也は言い放った。

だが利美はまったくそれに動じていないようだった。あいかわらず、彼女は笑っている。

「あらあ、あなた、もしかしてもしかすると、まだ信じてないのか

しら？ 私たちが“プログラム”に選ばれたこと」

「そんなわけないだろ」浩也は即答した。「益村や沼垣たちが、あの部屋で政府の女に殺されたんだ！」

「じゃあ、当たり前のこと、訊かないでくれなしかしら」

利美は、眼を瞑って暗唱するかのように言った。墮天使の笑顔は変わらない。

「だから俺は、信用できる仲間を集めて、この状況を打破しようと思ってるんだ。おかしいじゃねえか、クラスで殺しあうなんて！」浩也は頭から正論を掘り出して、利美にぶつけた。

「……………」

人として当たり前のことを言っているつもりだった。人の持つ、普通の気持ちを表しているのだ、自分の喉から生まれて雑木林の中に吸い込まれている、この言葉たちは。

「あいつらの、政府のクソどもに殺されたあいつらの仇を討つんだ！ この狂った状況を、終わらせるんだ！ だから」

「言いたいことはそれだけかしら」

かちやつ、という金属音がして、弁論はそれによって打ち切られた。浩也がはつきりと言えたのは、そこまでだった。

利美の自動拳銃 コルト・ガバメントの口が浩也に向いていた。丁度、眉間のあたりを狙っているみたいだった。

っ！

「油断しすぎよ、斧持さんを撃った私にそんな無防備な体勢をいつまでとっているのかしら」

「お前も、やる気なのかよ……………」

奥歯を噛み締め、改めて自分の中で認識した。遅かった、あまりにも。

「…………あなたはお人好しのおバカさんね、鶴本君。」

そう言って、上半身の姿勢をそのままに、利美はさらに距離を詰めた。

じり、じり、じり……

「他人なんてそんな、どちらに転ぶか分からないものに掛けるなんて……この状況で、まだそんな正義の味方気取っているなんて……甘いわ、あなた。チョコレートパフェやプリンアラモードなんか目じゃないわね、甘すぎて吐き気がしそうよ」

浩也は何も言えなかった。

じり、じり……

「そんな甘いものを放っておくとどうなるかわかる？」

浩也は、答えられなかった。

じり。

「蟲に集られるのよ、付け入られるのよ」

浩也の眼前で足を止めた利美は、そう告げた。

「だから今のあなた、アタマわいてるわ。イカレてるわ……」挑発的な声で、くすくすと彼女は笑う。

そして、彼女は言った。告げた。結んだ。

「そのアタマ、横山利美が消毒してあげる」

目の前で、利美がトリガーに白い指を掛けている。それを確認しただけで、浩也の視界は再び渦巻き始めた。

辺りの空気が糊のようにねっとり、喉に絡みつく。紫色の重圧が身体に押し掛かった。

向けられた銃口を中心に、音が螺旋を描いて吸い込まれていく。それは発砲音となつて、自分をこの世から離脱させる発射ベルとなるのだろ。そんな思いが浩也の頭のどこかを掠めた。

おいおい、俺はさっきも死にそうになつたはずだろ？ 何やつてんだよ、鶴本浩也！

冷静になれ、どうやって？ 知るか、でも、このまま犬死は、したくない！

懸命に渦を振り払う。

くそ、くそ、横山は、こいつの思想は間違ってる！人をこんな簡単に殺して言いわけねえだろ！

だが、その時、浩也の頭で、先程まで発していた言葉の数々が、無意識にフラッシュバックした。

そして、瞬間的に思っ
て、気づいた。

俺の言葉も、間違ってたのかもしれないな……。

「でも、俺は、このイカれた状況から、大切なものは救いたい。絶対に生き残って、政府の奴らを倒して、これを終わらせる」

誰に言うのでもなく、浩也はそう告げた。飾り物無し、本音だった。少なくとも、そのときは。

「その為に、俺は生き延びるんだ」

その言葉を聞いてなのか、利美の目が一瞬だけ、大きく開かれた。大切なものを……救う？」

浩也の発した言葉を、一つ一つ利美は反復した。

「ふうん、そう…そうなの…」

利美は静かに、そう言った。そして

[illegible]

利美は浩也に銃口を向けたまま、余った手で前髪を一度掃った。涙を拭っているようにも見えた。

「はははは……そうなの、分かったわあ。じゃあ試してみる？ その信念、結果として出すことができるか」

「な……に？」

浩也は利美が何を言っているのかを、理解してしまった。

「あなたの大切なもの、このゲームの中で守ってみなさいな。あなたがこのゲームに乗らないと信じているクラスメイトたちを。そうね、特に教室で政府の兵士さんたちに殺されないように守った愛しい愛しい王女様なんかを！ もう一度私の手から守り通してごらんなさい。私がクラスメイトを殺してこのゲームで生き残れば、私の勝ち。私を殺してあなたが大切なものを守り通せば、あなたの勝ちよ。うふふふふふっ」

利美はそう言つと、ざつ、と後退して、銃を降ろした。

「だから今回は見逃してあげるわ。もつと成長して、私を仕留めてみなさい、鶴本君。あなたは先生にも認められた、大量殺人者なんだから」

利美は分校での闇口とのやり取りを、浩也に思い出させた。

「ちがう！ あれは奴が勝手に言っただことだろ！」

「うふふふ、どちらにせよ、いずれまた合間見えることになるわ。私はもつともつと強くなって、あなたを壊してあげる」

そう言つと、彼女は踵を返して走り出した。

「待て！ 横山！」

叫んだが、そのときにはもう、彼女の姿は雑木林の奥へと消えていた。

追いかけてようとしたが、恵子の存在がそれを制してしまった。浩也はただ、その闇を見つめるしかなかった。

【残り36人】

中盤戦4 宣戦布告（後書き）

読んで下さっております。

相変わらずの不定期更新申し訳ありません（ - - ; ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0950a/>

ANOTHER BR

2010年10月14日13時47分発行